

五指の間を行き来され、指全体を包み込むようにねっとり香油を揉み込まれたかと思うと、小指から順番に、一本一本の指をくにくにとマッサージしてくる。

「…っ、？……う、…っ、ああ…っ、」

男の力加減は絶妙で、むずむずする感覚と心地よさを交互に与えられると、揉まれている場所からいよいよ意識が逸らせなくなる。しなやかな指に与えられる感覚にただただ翻弄されて、ゆっくりと足裏を含めて指全体を揉まれたあとに、ぬるりと指の間に指を通されると、びくッ、と腰が跳ねてしまうほどだ。

「う…っ、……んう…っ、あ、…っああ…、…ツ、」

それでも容赦なく、今度は足首あたりから撫で下ろすように揉み込まれると、声を抑えることが難しくなる。

すぐ傍でぐるる、と低いうなりが聞こえる。

冷汗が背筋を伝い、これ以上声をたてては駄目だと力むたびに、一層男の手の感覚が鮮明に感じられてくる。

「…あ…っ、あああ…っ、う…、うう…ツツ、」

もしかしたら、この花の香りのせいもあるのだろうか。

先程から腰がびくびくと小さく跳ねて仕方がない。

「腰、揺れてるね」

あからさまに言葉にされ、かあつと耳まで灼^やけてしまう。

足を揉まれて感じるだなんて、まるで変態みたいだ。

「そろそろいい頃合いかもね」

「ひう…ツツ！？、！、」

男は水差しで洗い清めた手を、唐突に少年の幼茎に戻す。

「ほおら、硬くなってきた」

「あ、ああ…っ、いや…あ…っ、！」

輪状にされた男の指に、根元からゆっくりと扱きあげられる。

それだけで、少年はがくがくと腰を小刻みに突き出してしまった。

「どう？親玉の居場所、言う気になった？」

男は口の片端を吊り上げながら、愉快そうに問う。

この男は、暗殺の指示を出した人間を何としてでも聞き出すつもりだ。

そして尋問に答えたが最後、この場で自分をきつと殺すに違いない。

情報を吐ききったくせ者に、生かしておく価値などないはずだから。

少年はいつの間にか込み上げていた唾をごくりと飲み込んだだけで、あとは唇を固く引き結んだままでいた。

「まだ何も言う気にはならない……、か」

そうだよ、と男は少年の顔を見て呟き、

「ああ” !!!、♡」

少年の小さな雁首を、じゅぽっ！と音がしそうなほど強く扱き上げた。

拍子に、腰を一際大きく突き出してしま^{ひときわ}う。

その滑稽さを冷ややかに笑うような視線を浴びせかけながら、男は少年の膝裏を持ち、左右に割りひらいてくる。

「ならば言いたくなるまで拷問するだけだ」

物騒すぎることを言いながら、男は少年の脚の間に腰を据える。

自らの長い上衣の裾をたぐり、下衣をくつろげる。

「……い…、いや………」

反射的に腰がひけてしまうも、手を万歳の形で上方に縛り付けられていては逃げようもない。

恐ろしくて、男のほうを見る気になれず横を見ると、青く鋭い視線と目が合っ
て悲鳴をあげそうになる。

腰の下に分厚いピローを差し入れられた感覚がして、男に視線を戻すよりもはやく、

「！ああ…ツツ、ぐ、…！！！」

灼熱の塊が後孔へ押し入ってきた。

「なるほど。これはたしかに、初めてというわけではなさそうだな」

男は少年の肉壁のやわらかさに、納得したような感心したような声で呟く。

当の少年といえば、あまりの圧迫感に驚愕していた。

普段から男を受け入れ慣れてはいるので、唐突に挿入^{いれ}られたくらいでは別にな

んともない。

しかし——、

この男の大きさは一体何なのだろう。

何人も今まで客をとってきたから、中には大きいと思うような人もいた。けれど——

……

「は…、あ……、あ……っ、」

息を継ぐ方法を忘れたかのように、少年の胸ははげしく上下していた。

「あ” ツツ、！」

みりっ、と音がして、男が本格的になかへ挿入^{はい}ってくる。

まさか、こんなものを一番奥まで挿入^{いれ}るつもりなのか。

「……っひ……、い…、いや……っ、ぬい…て……っ、……っ、…、」

細く締まる喉からは、か細い声しか出ない。

隣にいる獰猛な生き物も恐ろしいのは恐ろしいが、それとは別の意味で体内に

押し入ってくるものが怖かった。

「……やはりきついか。私のものにも専用の香油を纏わせてあるから、大丈夫だ
と思ったんだけどな」

たしかに、太魔羅^{ふとまら}からはぬるついた感触が伝わってくる。

けれどそんなものが無意味と思えるほどに、男のものは長大だった。まだ雁首も
全部挿入^{はい}きっていないというのに、それだけで張り裂けそうなほどなかが拵げ
られ、ずっしりとした全体の重さが察せられる。

「……香油の量が足りなかったか。ならば……」

「ひ…ツ、！？、」

図太いものが不意に抜き去られ、代わりに一層ぬるつとしたものがなかに挿入^{はい}つ
てくる。

見ると男が香油をふんだんに纏わせた中指を少年のなかへ挿入^{いれ}ていて、そこを
ほぐすように関節を曲げ伸ばしされる。

「う…、うう……、あ……、…つ、」

先程大きなものを啜え込まされたせいもあって、孔内はあっという間に潤ってい
く。

「あ…っ、！」

指を二本に増やされる。

とろけた蜜のなかを、男の指は自由に泳いだ。

くちゅ…、ちゅく、と水音が響くほど掻き混ぜられて、時折少年の腰がびくりと浮く。

「あ…、ああ……、あ……っ、♡」

気づいた時には、漏れ出る声をまた抑えられなくなっていた。

なかで触れられた箇所から、腰にジンとくる熱さがある。

潤った肉洞のより深く、探るように指を動かされると、じっとはしてられない疼きが込み上げた。

「う…、♡うう……っ……っ♡、」

隣に猛獣がいるのに。

声を出せば、トラを刺激するかもしれない。

それがわかっていて、声を殺すことができない。

「あああ…っ、♡」

水気をふんだんに含んだ場所から指が抜き取られる感覚に、腰が跳ねる。

かと思えば、

「あ” ……ッ、♡！」

一呼吸も間を置かず、再び男の太^{ふとまら}魔羅に肉環をこじ開けられる。

「……ましになったな」

男は呟くと、ゆっくりと腰を挑ませてきた。

「…ああ……っ♡…、あ……、……っ♡、」

たしかにすべりはよくなったが、圧迫感は先程のままだ。

香油でなかを揉みほぐされたのが効いているのか——孔を割り拓いてくるとん

でもない質量から、内壁があきらかな快感を拾い上げる。

男のものがなかをゆっくりと通過する感覚に、背筋をぞくぞくとしたものが駆けて

いく。

「……ふふ、あんまり締め付けないで」

男は静かな声で、あやすように言う。

声は優しいのに、腰の進め方には容赦がない。

ゆっくりとではあるが、確実に奥へ奥へと肉壁を割り拓いてくる。

「…う…、う、あ…っ、…ああ…っ、♡」

脚の付け根がぶるぶると震える。

ついに奥のほうまで男が来て、肉洞全体をありえない程大きく拡張されてしまう。

「あ” ツッ！♡♡♡」

最後はずんっ！、と突き上げるように雁首を奥にねじ込まれ、躰の芯に衝撃と快感が同時に疾^{はし}る。

「いい眺めだなあ……」

男は自らの全容を収め込まれた震える少年の胴体を見下ろし、いくぶんか加虐的な瞳^めで笑った。

「どう……？親玉のこと、話す気になった？」